



老年栄養TOPIC:
サルコペニアの摂食嚥下障害
～高齢モデルで考える新しいetiology～

日時 2020年8月4日(火) 12:10~13:00

座長 若林 秀隆 先生

東京女子医科大学リハビリテーション科 教授・診療部長

演者 前田 圭介 先生

国立研究開発法人 国立長寿医療研究センター 老年内科 医長

老年栄養TOPIC: サルコペニアの摂食嚥下障害 ～高齢モデルで考える新しいetiology～

老年栄養に関する近年最大のトピックの一つに「サルコペニア」が挙げられる。骨格筋量減少と、筋力または筋機能低下を指すこの病態はICD-10に収載された疾患である。一方、摂食嚥下障害は、いわゆる老年症候群の症状の一つであり、高齢者医療でしばしば遭遇し治療や対応に難渋する。約10年前、サルコペニアが摂食嚥下障害を引き起こす可能性に言及した報告が本邦から発表された。それ以降、サルコペニアと摂食嚥下障害の関連、因果関係についての研究が盛んにおこなわれてきている。2019年には本邦の4学会が動いた。サルコペニアと摂食嚥下障害についてのポジションペーパーを4学会が合同で日本老年医学会の英文誌(Geriatr Gerontol Int)に発表したのである。

サルコペニアが原因となって引き起こされた摂食嚥下障害をSarcopenic dysphagia(サルコペニアの摂食嚥下障害)と呼ぶ。従来の教科書には、

脳卒中、神経難病、認知症など、神経学的な異常で説明できる病態が摂食嚥下障害の多くの原因であるように記載してあり、サルコペニアや筋原性の摂食嚥下障害については詳しく書かれていない。そして、近代の摂食嚥下リハビリテーションは、脳卒中や神経難病を対象とした研究で体系作られてきた。サルコペニアの摂食嚥下障害に効果があるかどうかは不明である。もしかすると、サルコペニア高齢者の摂食嚥下障害にはサルコペニアに対する全身的なアプローチが重要なかもしれない。サルコペニアに対するアプローチの基本は運動(活動)と栄養である。喉だけをトレーニングしようとする従来型の摂食嚥下リハビリテーションでは、サルコペニアの摂食嚥下障害を効率よくケアできないのではないかと考えられる。当日は、サルコペニアの摂食嚥下障害のknownとunknownを含め概説する。

前田 圭介 先生ご略歴

- 1998年 熊本大学医学部卒業、同年熊本大学第二外科入局
- 2011年 玉名地域保健医療センター摂食嚥下栄養療法科 NSTチェアマン
- 2017年 愛知医科大学大学院緩和・支持医療学 講師
愛知医科大学病院栄養サポートチーム専従医
- 2019年 愛知医科大学大学院緩和・支持医療学 准教授
- 2020年 国立研究開発法人 国立長寿医療研究センター 老年内科 医長
愛知医科大学大学院緩和・支持医療学 客員教授

